# 太宰府人物志

資料室だより⑱

## 閨秀俳人田上菊舎

田上菊舎は、その生涯のほとんどを行脚の旅に過ごした女流俳人として有名ですが、俳諧はもちろん和歌や漢詩の諸文芸に通じ、茶道・書道・絵画・弾琴の道を究めた傑人でもあります。宝暦3（1753）年、長門国豊浦郡田耕村（現下関市豊北町）に長府藩士田上由永の長女として生まれ（本名は道）、16歳で同村の村田家に嫁すも早くに寡婦となり、29歳で得度（萩市清光寺）。尼衣に身を包み各地の文化人たちを訪ね歩きますが、文政9（一八二六）年74歳で他界するまでに、全国を巡った距離は概ね二千里（約8千キロ）。うち九州に渡ること4度。ここ太宰府にも幾度か杖をとどめます。文化元（1804）年52歳の時によんだ句「こがれ残る小春の木々や竈門山」はよく世に知られるところですが（「手折菊」）、今回は菊舎が34歳で初めて太宰府を訪れた時のことを紹介します。

故郷田耕は美濃派俳諧の盛んな地で、菊舎は出家後の天明2（1782）年美濃国不破郡岩手（現岐阜県不破郡垂井町）の是什坊傘狂（以哉派六世）に入門、一字庵の号を授かり、美濃派連中への紹介状を得ます。菊舎が初めて九州に渡るのはそれから4年後の天明6（1786）年のこと、傘狂の高弟百茶坊巒古に同行、道中俳諧興行を催しつつ、福岡藩儒医亀井南冥とも対面を果たし、単身では長崎を巡遊します。

この九州行脚に関して菊舎はいくつかの紀行文集を遺しており（「つくしの旅　二」「九州行」「一声行脚」）、その中の「九州行」には福岡から太宰府を経由して佐賀へ向かった時のことが記されています。10月10日宰府宿に滞在、文道の大祖を祀る太宰府天満宮に詣で、不出門の詩「都府楼纔看瓦色、観音寺只聴鐘声」（『菅家後集』）になぞらえて

「窓に冴つ其鐘の音も月影も」

としたため、また早朝の境内で

「さゝ啼て飛ぶや御庭の朝日影」

とよんでいます。

ところでこの九州旅行は、近世俳壇史研究において重要な意義を与えられています。芭蕉の百回忌を前に、以哉派勢力の伸張という重大使命を担って西国に派遣された百茶坊は、この旅で博多の俗仙庵披雲ら筑紫有力俳人との交流を深め、後の九州地方における美濃派俳諧の展開に大きな役割を果たしたとされます。菊舎の同行は優れた俳諧師としての才能を見込まれたうえでのこと、と言えるのではないでしょうか。

市史資料室　藤田理子